

還るところはみなひとつ

— 癌の身を生きる —

鈴木章子



目次

一、乳癌との出会い……………	1
■体に折れるような激痛……………	5
■「私は生きていたのだ」……………	10
■三年目の検診で再入院……………	16
二、はじめて聞こえた子どもらの声……………	23
■家を出る時大わらわ……………	24
■転移癌——上葉部肺の切除……………	30

■ がんばってもできないことがある……………	36
■ 癌をひきうけるすがたを子どもものに……………	42
三、 還るところはみなひとつ……………	49
■ 病院は章子への「今現在説法」の場……………	50
■ お念仏の中で——里の父母の死……………	55
■ 如来さまのはげまし……………	60
■ 大きなお方にお預けした……………	66
■ 母の私への子守り歌……………	71
■ 仏さまのピンタ——「章子、目覚めよ」……………	74

## 一、 乳癌との出会い

皆さん、お晩でございます。私、もうほとんどの方、ご存知だと思えますけれど、すぐそばの本町三九番地で西念寺というお寺の坊守をさせていただいております鈴木章子というものでございます。

私をはじめ、このお話を聞きました時に、町民大学で、五十名程度の人が来ますのでお話しして欲しいということでした。それで今私は、体調を少しくずしておりますので、原稿を用意したり、それから論旨をまとめたり、そういうふうなことができない状態ですので、おしゃべりは大の大好好きでございますので、座談会ふうに、おしゃべりさせていただけるのでしたらということ、お引き受けいたしました。

そうしましたら、三日前にお電話がありましたして、中央公民館の大ホールでするということをお聞きしまして、おったまげてしまったわけです（笑）。

さらにこられる方々を一般公募すると聞きまして、ますますおったまげてしまいました。そうしましたら、三日ほど前から、それを聞きました後、私の心にいる「みえはるくん」が、

「お前あんまり格好の悪いところ見せられないぞ」

と、ドタバタドタバタ騒ぐわけです。私はきつと、せいぜい五十人くらいなので、中央公民館のここの下の和室か、せいぜい役場の会議室くらいだろうというふうなことで、あてを立てておりましたけれど、ハズしましたので、「みえはるくん」が、盛んに騒いでドタバタドタバタするわけですね。ただ昨日は熱が一日中出ておりました、自分の体のほうがいうことを聞かないわけです。それで「みえはるくん」におしずまり、おしずまり、おしずまりと、「みえはるくん」をなだめすかして、そしてやはりはじめからお約束ど

おり五十名くらいの方と心得て、原稿もなく、脈絡もなく、ぶつつん、ぶつつんの想いつきのまま、皆さんにおしゃべりしていいこうというふうなことでここにまいりました。それで、まとまりのないお話になるかと思えますけれども、皆さんガマンして、皆さんの貴重な二時間、私のおしゃべりにお付き合いくださいませ。そしてその後、私はふっと想い出しました。以前聞いた言葉の中に、

あてたふんどし、はずさにやらぬ。

あてがはずれて、ナムアマダブツ

というふうな言葉がありました。ああ、あてだったなあと。今回、この講座を想っただけでも、それをありがたくいただいております。

### ■体に折れるような激痛

それで、今日は私が病気をしてその時その時見せていただいた、気づかせていただいた世界を皆さんに思いつくまんま、私の話をそれ一本にまとめてお話させていただきたいなと思います。

私が癌になりましたのは、昭和五九年の四月でした。当時、大谷幼稚園の園長をしております、朝、子どもと遊んでいますと、子どもが、

「えんちようせんせい！」

と言って、私の胸に飛び込んできました。その時に、体に折れるような激痛が走りました。それが私と乳癌との出会いでした。子どもが、あんまりびつくりした顔をして、哀しかなそうな顔をするものですから、

「ああー、このまんまじゃいけない」

と、その時決心いたしましたして、五月の初めで六月の運動会を控えて、時間があまりないものですから、五月の初めに北大（北海道大学）の第一外科にいきなり行ったわけです。先生の紹介状もなく飛び込み患者として行ったもんですから、先生が、

「あーっ」

と、たまげたくらいの飛び込み患者として北大の第一外科にまいりました。そして触診しまして、レントゲンしまして、そして最後に細胞診、一応お乳のところをとってみましょうということ、野球ボールよりちよつと小さめでしょうか、それくらいのをとりまして、そして糸を付けたまんま、その日に斜里に戻ってまいりました。そして、一週間後に、結果がわかるとい

うことでしたので、私本人に教えてくださいますということ、帰ってまいりました。

それから、一週間たちまして北大の先生からお電話がきました。その時に、

「鈴木さん、床に足をしっかりつけてください」

と言われました。そして、

「あのう……、えーと……」

と言い淀んでおられますので、

「先生、乳癌だったんでしょう」

と、こっちから尋ねますと、先生が、

「ええ、残念ですけれども悪性腫瘍でした。手術が必要ですので、二日後に病室を空けて待っておりますので、いらしてください」

ということでした。

「あつ、先生ありがとうございます」

そういった時に、私の目の前をスウィーッと一瞬、お釈迦さま、親鸞さま、蓮如さま、法然さま、亡くなったお寺の総代さんの大島の爺ちゃん、小柳さんの爺ちゃん、そういうふうな方たちが、目の前を一瞬スウィーッと通り過ぎて行きました。

そして、その群むねの中に私がいました。

「あー私、人間だったんだ。私、生きていたんだ」

そういうふうな想いが、ぐっぐぐーっと、こう胸からこみ上げてきまして、温かい涙が目いっぱいになりました。

電話の向こうで先生が心配されて、

「鈴木さん大丈夫ですか？」

とおっしゃってくださいました。

「ありがとうございます」

と受話器を置きました。

「あー私、人間だったんだ。私、人間だったんだ」

という感動で、びっしりになりました。

そして、

「その前の私は何だったんだろう」

ということ、私は考えるようになりました。そしてよくよく考えていきますと、私は「お化け」だったのです。なぜかという、外の声にただ踊らされて、ちょっと鼻高くして、ちょっと人より先に出ると何か優越感があつて、

「忙しい！ 忙しい！ 忙しい！ 忙しい！」、心の中は空っぽ、足は忙し  
いから宙を飛びます。忙しいという字は「心偏に亡くする」と書きます。そ  
の「お化け」だったのです。その「お化け」だということに気がついたのが、  
かなり後になってからです。

■「私は生きていたのだ」

それで、北大病院に二日後に入院いたしました。そうしましたら、私はこ  
こでいろんなことに出会いました。まず、時間がたっぷりあるもんですから、  
寝て考えることがたくさんあります。その時に、蘭越町らんこしのお寺のご住職であ  
る金石晃道先生の講演を何年か前にお聞きしました時に、  
「あなたたち、今日も一日あかーい着物をチャラチャラ着て踊ってしまった。

そのような、空しい一日ではなかったですか。夜、お布団ふとんの中で、その空し  
さに涙を流すことはありませんか」  
というお言葉と、もう一つは、

「どんな立派な家でも人間が住まない家は、すぐ朽ち果ててしまおうそうです  
よ。あなたの方の心の中に人間が住んでいますか。自分が住んでいますか」  
というお言葉が想い出されてきました。

そして私が、もしかしてこのまま幼稚園という座を失うかもしれないとい  
った行き場のないお先真っ暗な気持で、ちょうど孤児、精神の孤児になって  
しまいました。

「私の人生これでよかったのかしら、私、間違っていたんじゃないかしら、  
取り返しのつかない時間を過ごしてしまったのではないかしら」